

I-28

選点法を応用した4辺固定Mindlin板の固有値問題の解析

北海道大学工学部 学生員 大場 誠道
 北海道大学工学部 正会員 三上 隆
 北海道大学工学部 正会員 芳村 仁

1. はじめに

Mindlin板の固有値問題の解析は、境界条件によっては解析的取り扱いがしばしば困難となるため、有限要素法、有限帯板法及びRayleigh-Ritz法などの近似計算手法が用いられてる。本報告は、選点法とKantorovich法を併用する手法を、Mindlin板の自由振動問題及び座屈問題に適用し、その有効性を調べたものである。

2. 基礎方程式

解析の対象とするMindlin板は、一様な圧縮応力を受ける等方等質で一様な厚さ(h)の矩形板(B×L)とする(図-1)。たわみをw,x及びy方向の回転角を ψ_x , ψ_y と記せば、Mindlin板の運動方程式は次のようになる。

$$\left. \begin{aligned} L_1 &= D(\psi_x''/L^2 + \frac{1-\nu}{2} \psi_x''/B^2 + \frac{1+\nu}{2} \psi_y''/LB) + K_G h(W'/L - \psi_x) - \frac{h^3}{12}(\rho \psi_x'' + \delta_x^0 \psi_x''/L^2) = 0 \\ L_2 &= D(\frac{1-\nu}{2} \psi_y''/L^2 + \psi_y''/B^2 + \frac{1+\nu}{2} \psi_x''/LB) + K_G h(W'/B - \psi_y) - \frac{h^3}{12}(\rho \psi_y'' + \delta_x^0 \psi_y''/L^2) = 0 \\ L_3 &= K_G h(W''/L^2 + W''/B^2 - \psi_x'/L - \psi_y'/B) - h(\rho W'' + \delta_x^0 W''/L^2) = 0 \end{aligned} \right\} \quad (1)$$

ここに、 $D=Eh^3/12(1-\nu^2)$, K =せん断補正係数, ν =ポアソン比, G =せん断弾性係数, ρ =密度, $(\)' = \partial(\)/\partial \xi$, $(\) = \partial(\)/\partial \eta$, $(\) = \partial(\)/\partial t$

3. 解析手順

まず、式(1)を常微分方程式に変換する。そのため、ここでは、 $\xi=0$, $\xi=1$ で完全固定されたTimoshenko梁の振動形(たわみWと回転角 ψ)を用いてKantorovich法を採用する。即ち、解を調和振動の前提のもとに

$$\left. \begin{aligned} w &= L W(\xi) f_1(\eta) e^{i\omega t} \\ \psi_x &= \psi(\xi) f_2(\eta) e^{i\omega t} \\ \psi_y &= W(\xi) f_3(\eta) e^{i\omega t} \end{aligned} \right\} \quad (2)$$

と表し、式(2)を式(1)に代入し、Kantorovich法

$$\int_0^1 L_1 W(\xi) d\xi = 0, \int_0^1 L_2 \psi(\xi) d\xi = 0, \int_0^1 L_3 W(\xi) d\xi = 0 \quad (3)$$

を適用すると、 $f_1(\eta) \sim f_3(\eta)$ に関する次式の常微分方程式が得られる。

$$\left. \begin{aligned} a_1 f_1(\eta) + a_2 f_2(\eta) + a_3 f_2(\eta) + a_4 f_3(\eta) + k f_1(\eta) + \Omega^2 f_2(\eta) &= 0 \\ a_5 f_1(\eta) + a_6 f_2(\eta) + a_7 f_3(\eta) + a_8 f_3(\eta) + k f_3(\eta) + \Omega^2 f_3(\eta) &= 0 \\ a_9 f_1(\eta) + a_{10} f_1(\eta) + a_{11} f_2(\eta) + a_{12} f_3(\eta) + k f_1(\eta) + \Omega^2 f_1(\eta) &= 0 \end{aligned} \right\} \quad (4)$$

ここで、パラメータkと Ω^2 は、

$$k = 12(1-\nu^2) \times (B/h)^2 \times \sigma_x^0 / E \pi^2, \quad \Omega^2 = \rho \omega^2 L^2 / G \quad (5)$$

次に、式(4)にshifted Legendre多項式の零点を選点とする選点法を適用すれば、内部選点での未知量を固有ベクトル $\{\delta_i\}$ とする次式が得られる^{1), 2)}。

$$[\alpha] \{\delta_i\} - k [I] \{\delta_i\} + \Omega^2 [I] \{\delta_i\} = \{0\} \quad (6)$$

解の精度の向上は、拡張Kantorovich法を用いてなされる。このとき、式(6)より得られる固有モードを試験関数とするKantorovich法により、先ず偏微分方程式を常微分方程式に変換し、それに選点法を適用する。以下、所要の精度で解がもとまるまで上述の手順を繰り返す。なお、常微分方程式の係数の評価に現われる積分は、sifted Legendre多項式の零点を分点とする補間型積分則を採用する。

4. 数値計算例

数値例では、せん断補正係数 $k=\pi^2/12$ 、ポアソン比 $\nu=0.3$ とした。なお、選点法とKantorovich法の組合せよりなる繰返し計算の回数第 i 回目と記述する。

表-1に4辺固定正方形板の自由振動問題を例にしたときの内部選点数 M の解に及ぼす影響を示す。表の値は第1回目の結果であるが、 $M \geq 9$ で良好な収束性がみられる。なお、表には、参考のためにDaweら³⁾によるRayleigh-Ritz法の結果及びそれに対する本計算値の相対誤差(%)を示した。これによると両手法による結果はよく合致している。

図-2は、4辺固定板の座屈問題に対する繰返し計算回数 i の影響をみたものである。 $M=11$ による結果は、正方形板($L/B=1$)及び長方形板($L/B=2$)の板厚比 $L/h=10, 100$ にたいして、一定値に非常に早く収束し、2ないし3回の繰返し計算で一定値に達している。

5. まとめ

以上に、選点法とKantorovichの方法の結合によるMindlin板の固有値問題の解析法を提示した。本解析法は、比較的少ない内部選点数と繰返し計算で十分な精度の解を与える。

参考文献

- 1) Mikami, T. and Yoshimura, J., Application of the collocation method to vibration analysis of rectangular Mindlin plates, Compute. Struct., Vol.18, pp.425-431, 1984.
- 2) 三上 隆・芳村 仁, 選点法による固有値問題の解析, 構造工学における数値解析シンポジウム論文集, pp.10~15, 1986.
- 3) Dawe, D. J. and Roufaeil, O. L., Rayleigh-Ritz vibration analysis of Mindlin plates, J. Sound Vib., Vol.69, pp.345-359, 1980.

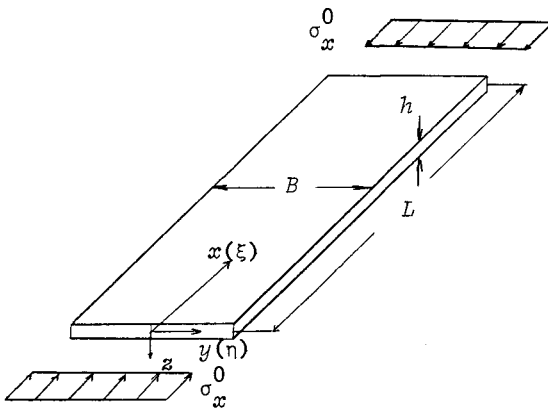


図-1 解析モデル

表-1 振動数パラメータ Ω の収束状況
($L/B=1, h/L=0.1$)

Mode $m \quad n$	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	$\epsilon = \frac{(5)-(4)}{(5)} \times 100$
	$M=9$	$M=10$	$M=11$	$M=12$	Dawe	
1 1	1.593	1.593	1.593	1.593	1.588	0.31%
2 1	3.042	3.042	3.042	3.042	3.029	0.40%
1 2	3.031	3.031	3.031	3.031	3.029	0.00%
2 2	4.260	4.260	4.260	4.260	4.256	0.09%
1 3	5.038	5.038	5.038	5.038	5.040	0.04%

m = Number of half waves in the x direction
 n = Number of half waves in the y direction

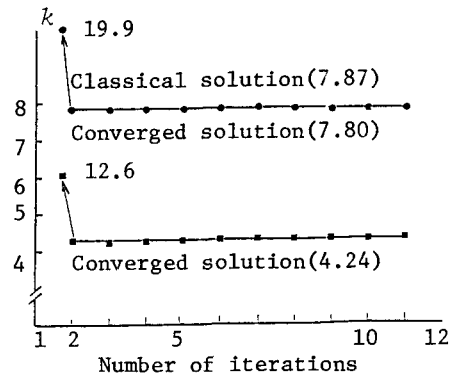
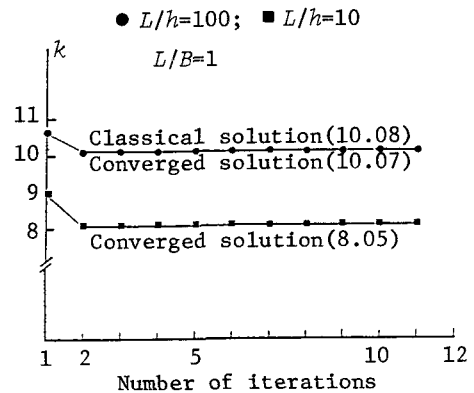


図-2 座屈係数 k の収束状況